第１学年国語科学習指導案

日　時　平成２６年　２月　８日（土）第２校時
対　象　第1学年3組　男子17名女子17名計34名
指導者　筧　理沙子

１，単元名　シリーズでよんでみよう
学習材　「となりのせきのますだくん」「ますだくんの１ねんせい日記」「ますだくんのランドセル」　（ポプラ社　武田美穂）

２，単元の目標
○いろいろなシリーズ作品を、想像を広げながら進んで読もうとする。（国語に関する関心・意欲・態度）
◎中心となる登場人物に同化して想像を広げながら読むとともに、それ以外の登場人物の行動についても関心をもって読む。（読む能力　ウ）
○感想を交流することによって、言葉には物事の内容を表す働きや経験したことを伝える働きがあることに気付く。（言語についての知識・理解・技能　イ（ア））

３，研究テーマとの関連
（１）子どもの実態
毎日の音読練習を通して文字を読むことに大分慣れてきている。また、５月に初めて学校図書館を利用した際、司書の「もりのなか」（マリー・ホール・エッツ）の読み聞かせを聞いた。その後、毎週の図書の時間には、様々な種類の本の読み聞かせの機会があり、本好きな子が多い。教室に学級文庫も置いてあるので、図書の時間だけでなく休み時間や課題が早く終わったときなどにも進んで読書をしている。好んで読んでいるのは、スミス先生シリーズやばばばあちゃんシリーズ、ねずみくんのチョッキシリーズ、バムとケロシリーズなどであるが、絵本などの物語文ばかりでなく、生き物の図鑑や科学読み物など説明的な文章の多く入った本も読んでいる。しかし、中には本の内容をじっくり読むのではなく、ただ絵を眺めていたりパラパラめくっただけで読んだつもりになっている子もいる。
今までに子どもたちは、１学期に「はなのみち」で初めて物語文の学習をし、簡単なお話の続きを想像したり、「おおきなかぶ」で役割読みの音読劇をしたりするなどし、場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読む学習をしてきた。２学期には「けんかした山」や「りすのわすれもの」などを学習し、少しずつ長い文章の物語文も読めるようになってきている。このようにこれまで「場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げる読み」を行ってきた児童が、本単元では初めて「自分が同化する人物以外の登場人物についても想像を広げられる読み」を目指し、そしてシリーズものの楽しさ、面白さに気付けるようにしていきたい。
この学習は、これから学習予定の「お手がみ」へとつながっていく。「お手がみ」では、「がまくん」の気持ちは豊かに想像を広げることができるが、「かえるくん」の気持ちを想像することはなかなか難しい。「がまくん」に同化しやすい物語の展開を考えるとそれも仕方ないが、低学年の子どもたちにとって、一度同化して読んだ人物以外の登場人物の気持ちを想像することは、困難なようである。この「お手がみ」の学習の前に、本単元で視点の違いを楽しむ読みの学習を行うことによって、シリーズ読書の楽しみを知り、あてもなく手紙を待つ「がまくん」に同化して読むだけでなく、「かえるくん」についても想像を広げて読もうとする姿を期待したい。視点

人物以外の登場人物の行動を中心に想像を広げることを楽しむことによって、低学年では自分で場面の様子について想像を広げながら読み、日常的に読む習慣が付く。そしてひいては中学年になった時視点を意識して登場人物の様子や場面を想像したり、登場人物同士がどのような関係にあるか、物語の上でどのような役割を担っているかなどを楽しみながら読んだりすることができると考える。
本単元でシリーズものを読む楽しさを実感することによって、学習指導要領にも書かれている通り、「読書活動の充実」を進め、生涯に亘って日常的に読書を楽しめるようにしていきたい。

（２）理解を深め、物語れる力
低学年の児童は、絵本や物語などを読むとき、登場人物に同化し、主観的な読みを楽しむ。実際、本学級でも「おおきなかぶ」では、自分が担当する登場人物になりきって大きなかぶを抜こうと力を合わせる気持ちになって劇を楽しんでいた。しかし、学年が進むにつれて、読む本の種類が絵本にとどまる子もいれば、少しずつ難しい文学作品へと広がりを見せる子もいる。要因として考えられることは、中学年で学習する「読むための技能的な能力」が育っていないからではないだろうか。
中学年になると、視点を意識して登場人物の様子や場面を想像する学習をする。それぞれの登場人物の性格を押さえ、登場人物同士がどのような関係にあるのか、物語の上でどのような役割を担っているかなどを考えることは、同化して楽しみながら読んできた子どもたちにとって、大きな壁であるが、楽しく本を読むためには必要な能力であると考える。
そこで、本単元では、同じ出来事が違う視点で描かれている「ますだくん」シリーズを学習材として取り上げる。最初に「となりのせきのますだくん」を取り上げ、「みほちゃん」の気持ちに同化しながら読んでいく。次に、シリーズものとしては第３作目であるが、「ますだくんの１ねんせい日記」を取り上げ、「ますだくん」が自分の日常生活を日記の形で紹介している本を読んでいく。第１作目で「みほちゃん」の視点で描かれていた出来事が、「ますだくん」から見ると全く別の話のように感じられる。この経験が、自分が同化して読む登場人物以外の行動にも興味を抱くきっかけとなれば、新しい読みへ一歩踏み出す感覚が得られるのではないかと考える。最後に、シリーズものとしては第２作目であるが、「ますだくんのランドセル」を取り上げ、「ますだくん」のさらに意外な一面に出会う。また「みほちゃん」の心に「ますだくん＝怪獣」という印象が芽生えた瞬間も分かり、前述の２冊とつながることがとても楽しく感じられるであろう。
こうして同化して楽しみながら読むだけでなく、視点の違いを楽しみながら自分なりにシリーズものの楽しさ、面白さを見付けて読む過程に「理解を深め、物語れる力」が育まれると考える。

なお、「ますだくん」シリーズは、全部で５冊ある。本単元では扱わないが、児童たちが興味をもって読むことを期待して、残りの２冊「ますだくんとはじめてのせきがえ」「ますだくんとまいごのみほちゃん」も学級文庫に置き、紹介したい。２冊とも、「ますだくん」と「みほちゃん」の関係にさらに面白い展開があり、友だちとして成長していく様子を楽しめる内容である。

（３）実感のある学びを生み出す学習環境デザイン

学習指導要領では、「言語活動の充実」が謳われ、国語科の学習指導のあり方も変わろうとしている。それが、「単元を貫く言語活動」である。本単元を貫く言語活動として、「シリーズ読み」を位置づけた。「シリーズ読み」とは単一作品だけでなく、複数冊あるシリーズ作品で想像を広げながら読書を楽しむことである。シリーズ作品を読めるということは想像を広げ、楽しんで読書をしている姿だと考える。楽しんでいなければ、シリーズ作品を読もうとは思わないはずだからである。そして、シリーズ作品を読んでいくうちに中心となる登場人物に同化して想像を広げながら読むとともに、そのシリーズに毎回出てくるそれ以外の登場人物の行動についても関心をもって読むことができるのではないかと考える。従って、本単元でねらう「場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むこと」（C読むことウ）を実現するのにふさわしい言語活動であると考えた。

シリーズとは、①一人の作家が書いたもので、主人公が同じもの、②主人公は異なるが、同一の作家が書いたもの、③作家も主人公も異なるが、読む対象を限定して読み手にふさわしいと考える作品を集めたもの、の３つに分けられると考える。朝比奈[i]によると、低学年は初歩読書期にあたる。この時期は、意味が簡単で未知の語があまり出てこない文章を一人で読み始める時期から本を読む習慣が付き始める時期だという。この時期の後半には語彙も増え、新しい言葉が出てきても推測しながら文意をつかめるようになっていき、文字で表された場面や情景をイメージすることができるようになってくる。このような読書能力の発達段階を踏まえ、本単元では①を取り上げる。また、①をさらに詳しく見ていくと、「ふたりはともだち」シリーズや「かいけつゾロリ」シリーズなどのような順番があまり関係なく、どの作品から読んでも楽しめるもの〈短編型シリーズ〉と「あらしのよるに」シリーズや「からすのぱんやさん」シリーズなどのようなある作品の続きもの〈続編型シリーズ〉に分類できると考える。今までの子どもたちの読書経験や今後学習予定の「お手がみ」へとつながっていくことなどを踏まえ、今回の「シリーズ読み」では〈短編型シリーズ〉を取り上げたい。単一作品だけでなく、相互の関連性の強いシリーズ作品を読んで自分なりのシリーズ作品の楽しさ、面白さを交流することで、物語に描かれている世界や内容について想像豊かに読むことができるとともに、シリーズを通じて登場する様々な人物に興味をもって読むことができるのではないかと考える。

○子どもが考えたい、考えざるを得ない学習環境デザイン

大熊は、「子どもが主体的にかつ意欲的に学ぶためには、学習指導は、あくまでも子ども自らの課題意識や興味・関心を起点として展開されなければならない。しかし、実際には、何事にも興味・関心を示さない子ども、自らの課題を自ら見付けることのできない子どもが多い。そこで、導入の前に、子どもたちの興味・関心や課題意識を豊かに醸成する時間を十分にとる必要がある。その時間が『０次』段階である。」[ii]と述べている。このように、いきなり単元を始めるのではなく、単元に入る前に児童が学習したいと思えるような土壌作りをすると児童が主体的に学習に臨めるようになる。そこで、図書館司書と連携し、「ますだくん」シリーズを学級文庫に置いておき、児童が自然と学習したくなるような環境を作っておく。また、「ますだくん」シリーズだけでなく、「おうさま」シリーズや「かいぞくポケット」シリーズ、「おさる」シリーズ、「ペンギン」シリーズなど〈短編型シリーズ〉を楽しめるようにしておく。さらに、お気に入りの本の紹介を互いにすることで、本に対する興味・関心を高めておく。

○実の場と結びつく考え方を生む学習デザイン

先にも述べたように、「シリーズ読み」という言語活動を位置付けた。単一作品だけでなく、相互の関連性の強いシリーズ作品を読んで自分なりにシリーズ作品の楽しさや面白さを見付け、交流することで、物語に描かれている世界や内容について想像豊かに読むことができるとともに、シリーズを通じて登場する様々な人物に興味をもって読むことができると考える。それによって、今後の生活の中でシリーズ読書を楽しむ姿が期待できる。

○子どもの思考・表現を引き出す学習環境デザイン

本単元で取り上げる「ますだくん」シリーズは同じ出来事が「みほちゃん」と「ますだくん」の２人の視点で描かれた本があるのが特徴である。「となりのせきのますだくん」と「ますだくんの１ねんせい日記」を読む際、同じ出来事を比較しやすいように掲示物を同じ大きさにしておき、整理しやすくする。整理すると視覚的にも分かりやすく、子どもの思考が深まると考える。

また、本単元は絵本を学習材として扱うので、子どもたち一人一人が手にする方が学習しやすいため、図書館司書と連携をとって絵本を用意する。しかし、実際問題として３５冊集めることは難しいので、絵本の提示方法を工夫していく。実物投影機で予め絵本の挿絵を１ページずつ取り込んでおき、電子黒板に映しながら授業を進めていく。予め挿絵を取り込んでおけば、実際に絵本を読んでいるのと同じようにあるページに戻ったり、読みたいページに飛んだりすることも可能である。

４．教科研究テーマとの関連

（１）教科研究テーマ「言葉を使って豊かに生活する子の育成
～実の場と結びつく子どもの学び～」

本単元で学習材として取り上げる本は、武田美穂作・絵「ますだくん」シリーズ（ポプラ社）の３冊である。初歩読書期である子どもたちにとって親しみやすい漫画絵本であること、自分たちと同じ１年生の学校生活という子どもたちにとって身近で想像しやすい場面設定であることから、子どもたちが登場人物に同化して楽しみながら読むことができる本である。

しかし、このシリーズの最大の面白さは、別の部分にある。それは、同じ出来事が違う視点で書かれている別の本があることである。最初の１冊を読んだ後で別の１冊を読むと、子どもたちは驚き、意外な発見がある面白さに気付く。３冊を読み終えた子どもたちは、最初の１冊に描かれていなかった背景に気付き、読書の楽しさを満喫するであろう。

文部科学省の「これからの時代に求められる国語力について」では「読書は，国語力を構成している『考える力』『感じる力』『想像する力』『表す力』『国語の知識等』のいずれにもかかわり，これらの力を育てる上で中核となるものである。特に，すべての活動の基盤ともなる『教養・価値観・感性等』を生涯を通じて身に付けていくために極めて重要なものである。」と述べられている。また、「読書習慣を身に付けることは，国語力を向上させるばかりでなく，一生の財産として生きる力ともなり，楽しみの基ともなるものである。」と述べられているように、本単元で新しい読書の楽しみ方を習得し、読書を日常的に楽しむことによって、「考える力」「感じる力」「想像する力」「表す力」「国語の知識等」が身に付き、言葉を使って豊かに生活する子も育成されるであろう。さらに、単元で取り上げるシリーズ作品の相互の関連に気付きながら自分なりのシリーズものの楽しさ、面白さを交流することで今後授業以外でも読書を楽しむ、実の場と結びついた子どもの学びが期待できる。

（２）育てたい子ども像について

文部科学省の「これからの時代に求められる国語力について」では、「毎日新聞社・社団法人全国学校図書館協議会の『学校読書調査』によれば、小学校から高等学校までの児童生徒の９割前後が『本を読むことは大切である』と認識している。それにもかかわらず、５月の１ヶ月間に１冊も本を読まなかった児童生徒の割合は、小学校から中学校、高等学校と進むにつれて高くなる。また、文化庁の『国語に関する世論調査』では、子供ばかりでなく全世代に渡って、ある程度の割合で『全く本を読まない』人が存在するという結果が出ている。このことは、子供のみならず、大人にも『読書離れ』の傾向が認められることを示している。」と述べている。低学年の今の段階では、読み聞かせをしてもらったり、図書の時間などで定期的に学校図書館へ行き本を借りたりするなどしているため、読書は好きな児童が多いが、学年が上がるにつれて、時間的な

余裕のなさや身近な大人が読書をする姿を見ることが少ないことなどの要因から読書離れが進むという現状がある。従って、育てたい子ども像とは、生涯に亘って日常的に読書を楽しめる子である。今後、学年が進むにつれて読む本の種類が絵本にとどまらず、少しずつ難しい文学作品へと広げていくことによって、日常的に読書を楽しめる子が育つと考える。そのためには、現在の「同化しながら楽しむ読み」だけでなく、本単元で学習する「視点の違いを楽しむ読み」も必要となってくる。

---

[i] 朝比奈大作　2002　読書と豊かな人間性　樹書房
[ii] 大熊徹 2012　国語科学習指導過程づくりーどう発想を転換するかー習得と活用をリンクするヒント　明治図書出版

5，学習指導計画（全６時間　本時５時間／６時間）

０次：様々な本を読む。お気に入りの本の紹介をする。

第１次：様々な本を読んだ経験を話し合い、学習の見通しをもつ。　…１時間

①どんな本を今まで読んできたかを発表し合い、シリーズの楽しさを知っていろいろなシリーズの本を読むという学習の見通しをもつ。

第２次：「ますだくんシリーズ」を読み、シリーズの楽しさについて話し合う。　…４時間

②「となりのせきのますだくん」を読み、「みほちゃん」と「ますだくん」の行動について読み取る。

③「ますだくんの１ねんせい日記」を読み、「みほちゃん」と「ますだくん」の行動について読み取る。

④「ますだくんのランドセル」を読み、「みほちゃん」と「ますだくん」の行動について読み取る。

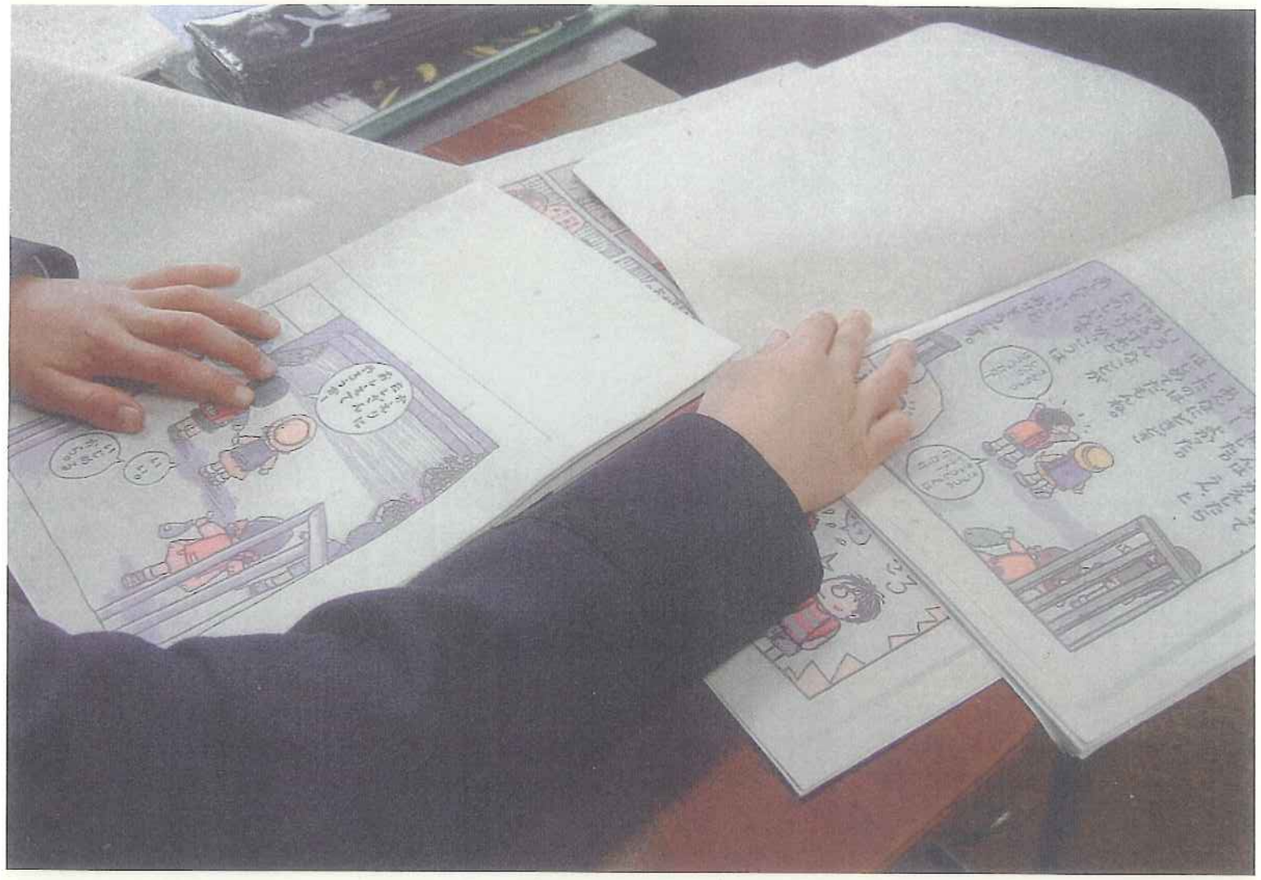
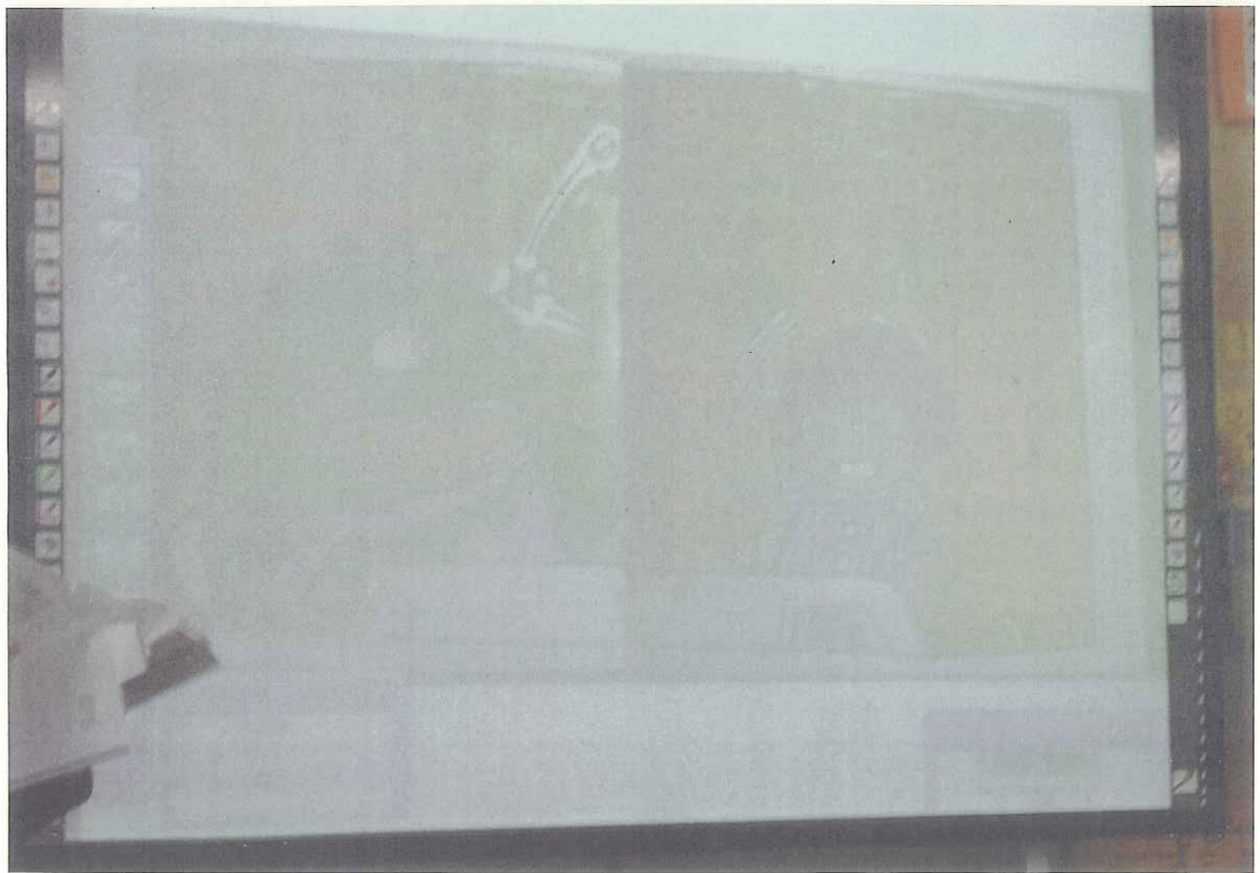
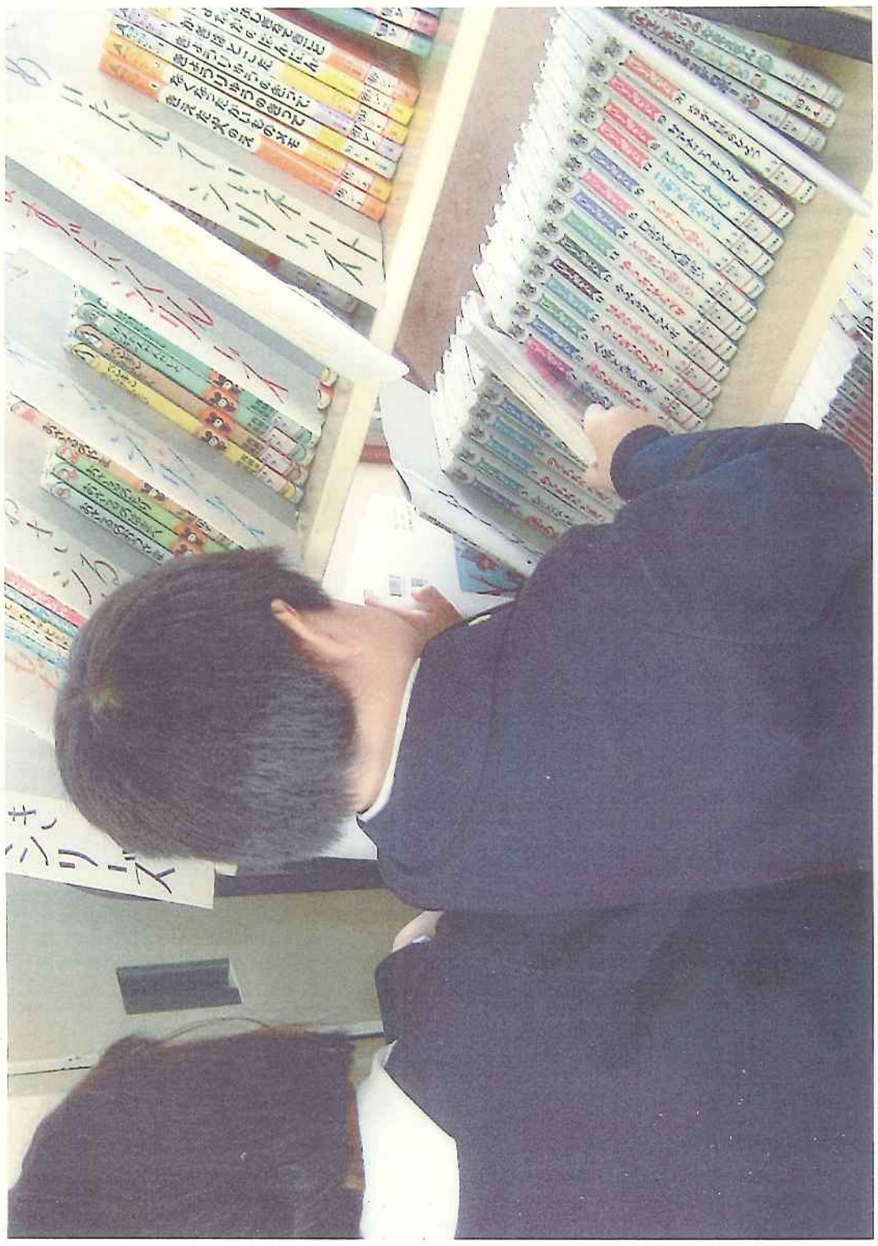
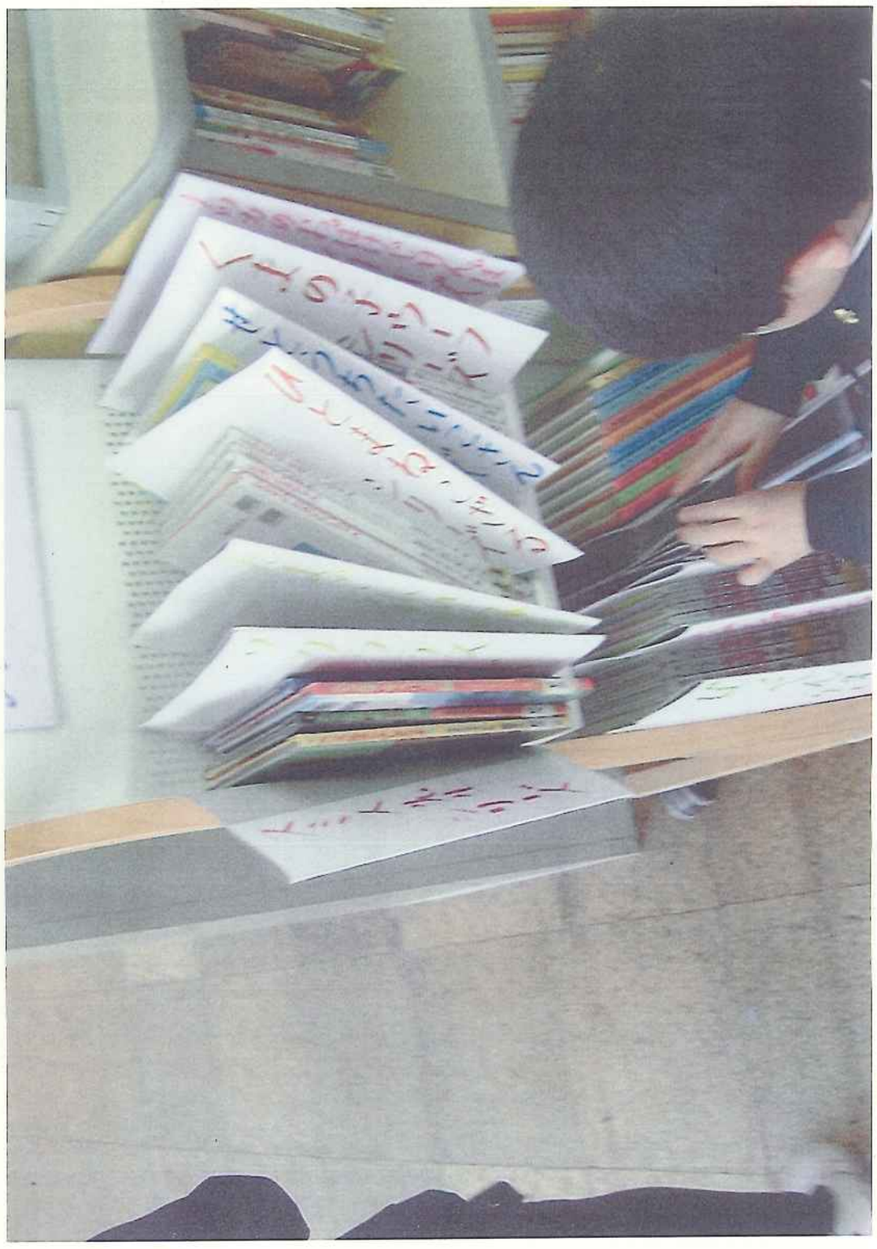
⑤「ますだくん」シリーズの面白さや楽しさについて話し合う。（本時）

第３次・活用：様々なシリーズの本を読んで楽しむ。　…１時間

6，本時の学習指導（５時間／全６時間）

（１）本時のねらい

・「ますだくん」シリーズを読んで見付けた面白さや楽しさを話し合う。

（２）本時の展開

主な学習活動（・予想される反応）	○留意点　☆研究テーマとの関連　◇指導事項　※評価
1，前時までの学習を振り返り、本時の学習課題を確認する。	○今までの学習が振り返られるような掲示をしておく。
「ますだくん」シリーズをよんで見つけたおもしろさやたのしさをはなしあおう。	
2，「ますだくん」シリーズを読んで見付けた面白さや楽しさをノートに書き、交流する。 ・みほちゃんがますだくんを怪獣だと思っているところが大好きです。怪獣なんて面白いから。 ・ますだくんはいじわるだと思っていたけど、実は違うところが大好きです。みほちゃんのためを思っていろいろやってあげているから。 ・ますだくんが妹の面倒をみているところが大好きです。とても優しいお兄ちゃんだし、自分と似てるから。 ・「となりのせきのますだくん」の本で、最後にますだくんが怪獣じゃなくて男の子になっているところが大好きです。最初はみほちゃんがかわいそうだと思っていたけど、ますだくんがちゃんと謝ってくれたから怪獣じゃなく見えるようになったんじゃないかなと思うから。	○なかなか面白さや楽しさを見付けられない子どもには自分なりに「ますだくん」シリーズの面白さや楽しさが見付けられるように、今まで読んだ絵本を読み返すよう声かけをする。 ☆自分なりのシリーズ作品の面白さや楽しさを交流することで、物語に描かれている世界や内容について想像豊かに読むことができるとともに、シリーズを通じて登場する様々な人物に興味をもって読むことができるようにする。 ◇自分なりに「ますだくん」シリーズを読んで見付けた面白さや楽しさを交流すること。（読むことオ） ※「ますだくん」シリーズを読んで見付けた面白さや楽しさを交流している。
3，交流した感想を発表する。 ・○○さんの話を聞いて、ますだくんがいじわるじゃないって気が付いた。 ・△△くんが教えてくれたんだけど、ランドセルの色が最初の「となりのせきのますだくん」からますだくんは赤でみほちゃんは青なんだよ！知らなかった！！	○自分が見付けた面白さ、楽しさと比べて発表させ、シリーズを読む楽しさを味わわせる。 ☆必要に応じて子どもが発表した「大好き！」を電子黒板に映し出す。
4，本時の活動を振り返り、次時の学習内容を確認する。	☆図書館司書と連携をとりながらできるだけ多くのシリーズの本を教室に置いておく。